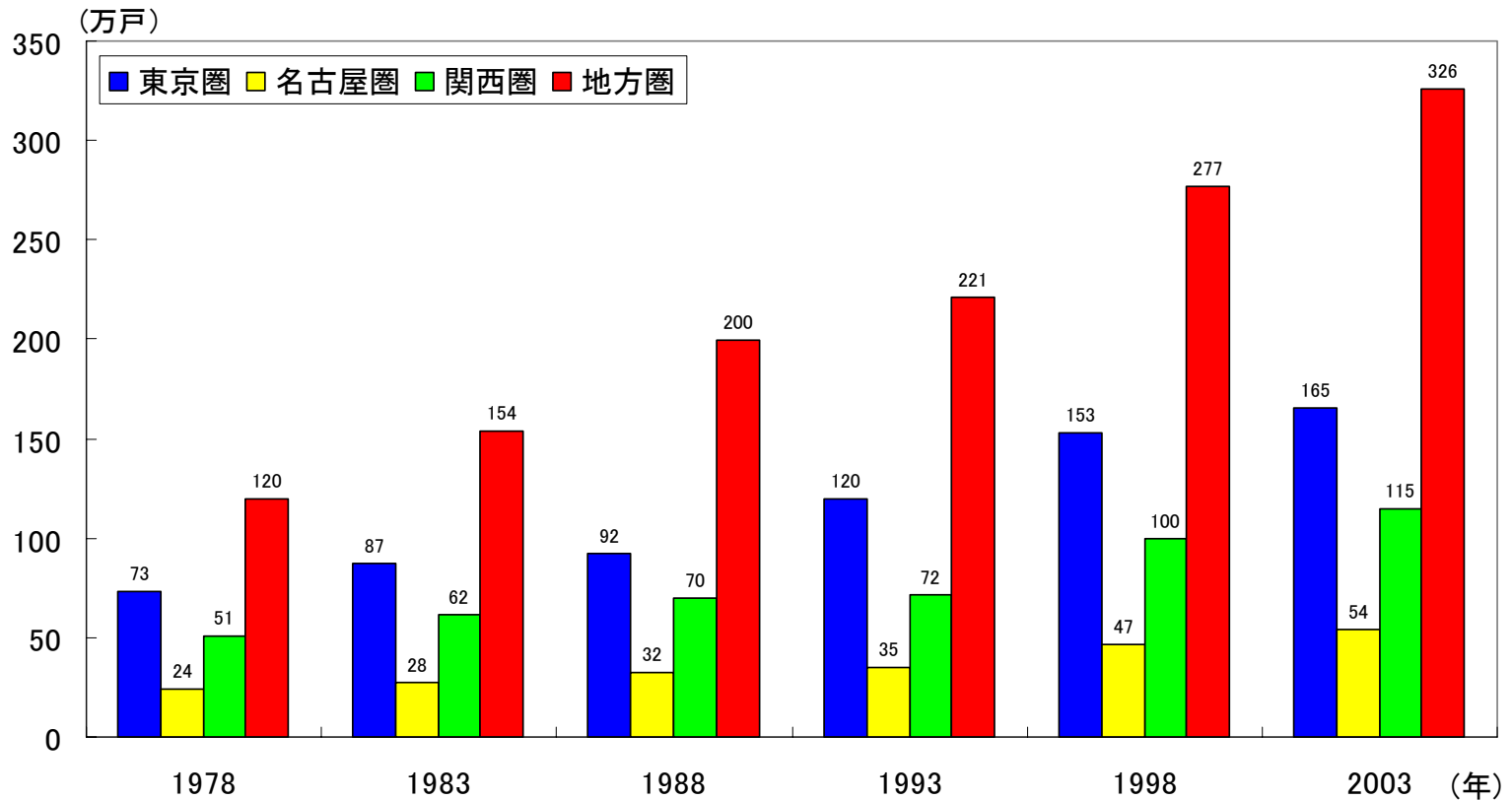


「多選択社会」のライフスタイル(住まい方)(1)

1-1. 空き家数の推移	1
1-2. 住宅ストックと居住ニーズのミスマッチ	2
1-3. ライフステージに応じた住み替え円滑化の例	3
2-1. 両親との距離別にみた交流状況	4
2-2. 親とのコミュニケーション	5

1-1. 空き家数の推移

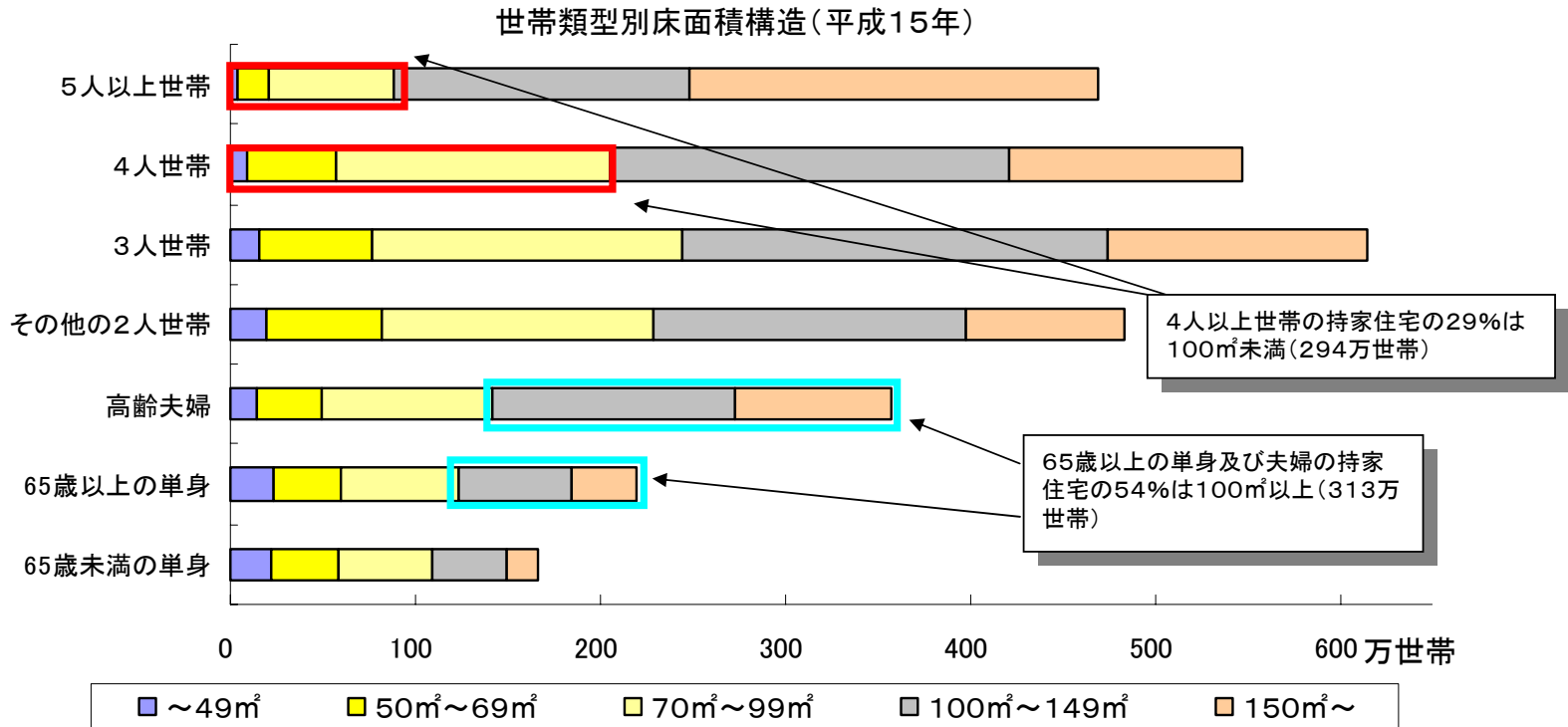


(出典)総務省「住宅・土地統計調査」をもとに国土交通省国土計画局作成。

※東京圏:埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県 名古屋圏:岐阜県、愛知県、三重県 関西圏:京都府、大阪府、兵庫県、奈良県
地方圏:東京圏、名古屋圏、関西圏以外の地域

1-2. 住宅ストックと居住ニーズのミスマッチ

65歳以上の単身及び夫婦の持ち家世帯の54%が100㎡以上の広い住宅に住む一方で、4人以上家族の29%が100㎡未満の住宅に住むなど、住宅ストックと居住ニーズのミスマッチが見られる。



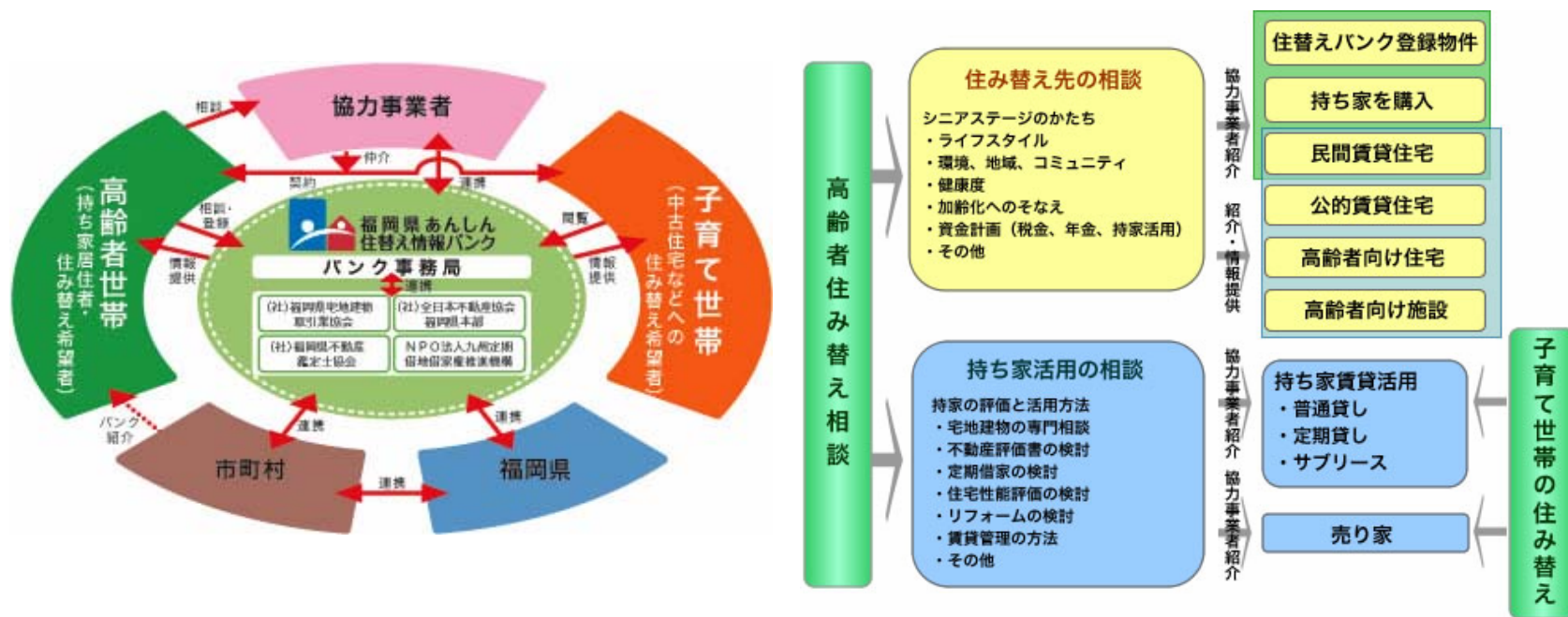
資料)平成10・15年 住宅・土地統計調査【総務省・統計局】(居住室の量数からの推計値)

(資料)平成10年、15年 住宅・土地統計調査(居住室の量数からの推計値)
 (出典)社会資本整備審議会答申「新たな住宅政策に対応した制度的枠組みについて」

1-3. ライフステージに応じた住み替え円滑化の例(福岡県あんしん住替え情報バンク)

郊外のベッドタウンなどに居住する高齢者世帯のなかには、家族構成の変化や加齢による身体能力の低下などから、「住宅が広すぎて維持管理が大変」、「病院の近くの便利なところへ引っ越したい」など、より利便性の高い都心部などへの住み替え意向を持っている場合がある一方、比較的狭い賃貸住宅に居住している子育て世帯は、子育てに適した環境の住宅を求めている。また、価値観の多様化から住まいに対する意識も変化しつつあり、必ずしも新築にこだわらないという方も増えており、中古住宅の需要も高まっている。

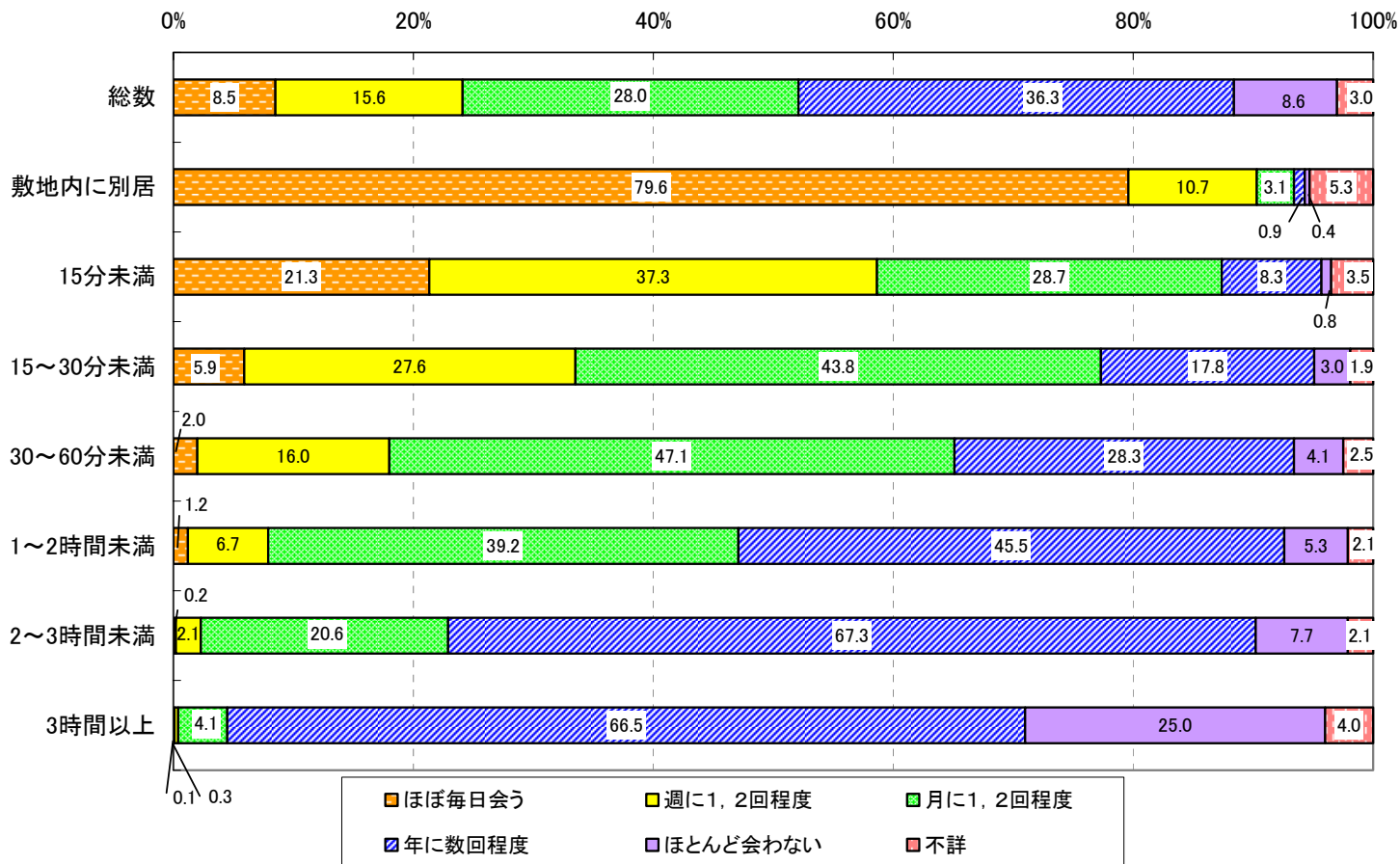
このようなことから、高齢者世帯等の住み替えの円滑化を図り、住み替えた後の空き家の有効利用を図るため、福岡県あんしん住替え情報バンクを設立し、住み替えに関する様々な相談を受け、適切な住まいに関する情報提供を行うために、関係団体と連携を図り、趣旨に賛同し協力する宅地建物取引業者を「協力事業者」として登録し、実際の不動産売却などに際して、この協力事業者をご紹介できる体制を整えている。



(出典)福岡県あんしん住替え情報バンクHP (<http://sumikae-bank.jp/index.html>)

2-1. 両親との距離別にみた交流状況

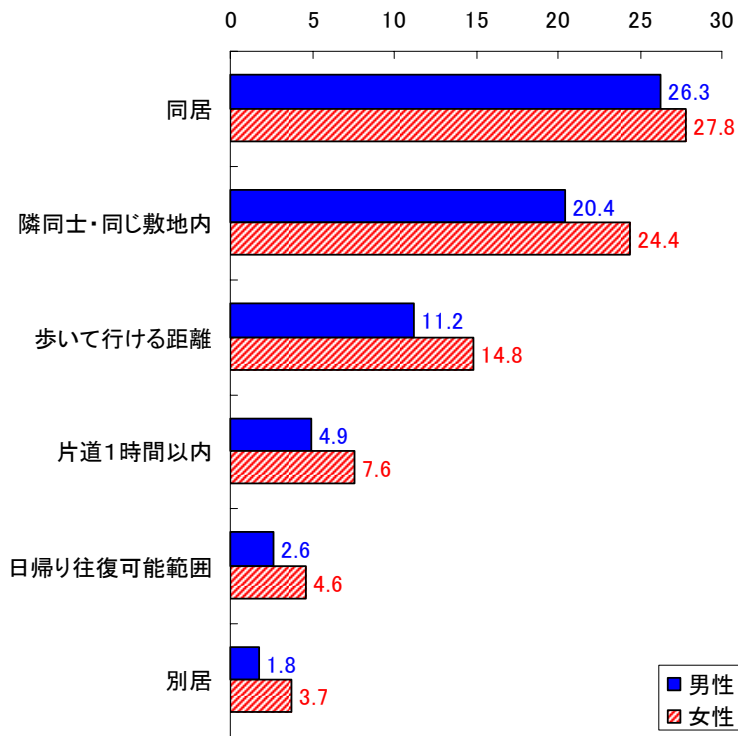
両親と週1回以上交流があるのは、親との距離が1～2時間未満だと約8%であるが、30～60分未満だと約18%、15～30分未満だと約34%となっており、より近くに居住する方が両親との交流が多くなっている。



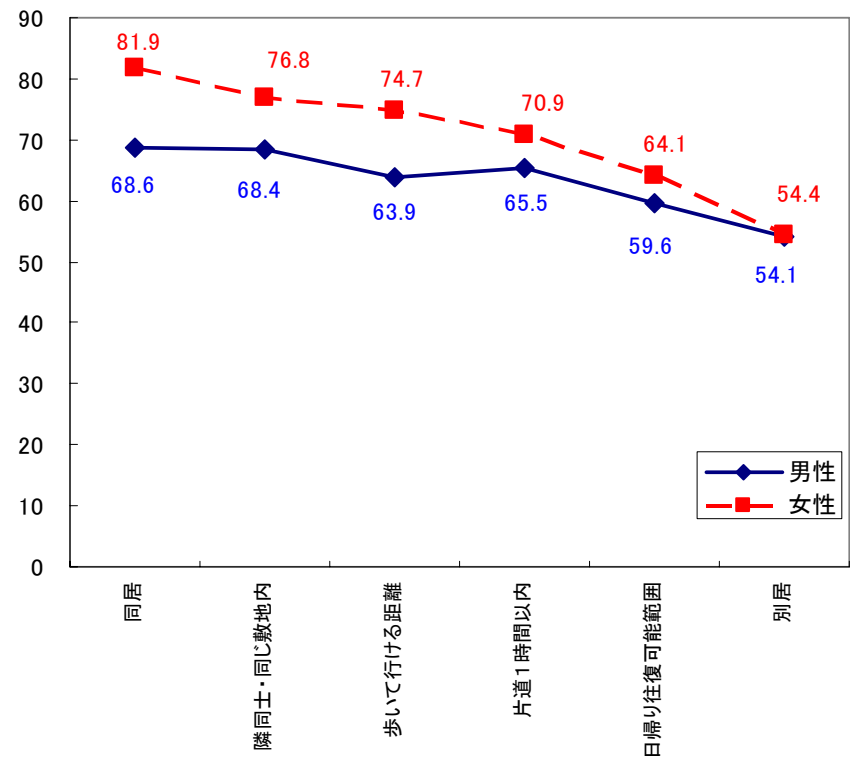
2-2. 親とのコミュニケーション

親との居住距離が近いほどコミュニケーション量は多くなっており、「歩いて行ける距離」であれば、2～3日に一度は親子のコミュニケーションがとられている。また、困った時に自分の親を頼りにする割合も、近くに住むほど高い。

自分の親とのコミュニケーション量(月間)



困った時に自分の親を頼りにする割合(%)



※コミュニケーション量: 日数換算(例 ほぼ毎日=30)

※別居: 日帰り往復不可能範囲